

「止められる」という「希望」を持って

原告団共同代表 中山田さつき

8月12日、午前9時、再稼働に不安を抱く多くの声を無視して、伊方原発3号機は動き出しました。現地で30年以上、伊方原発に反対し続けている斉間淳子さんは、ゲート前で「また地震や雷が来るたびに、原発は大丈夫かと思わなならん…」と、悔しさに目をうるませながら言われました。

たかだか電気のために（他の発電方法があるのに）、どうして私たちが原発災害に怯えながら暮らさなくてはならないのか？30km圏の住民には避難計画が立てられ、大分までも海を渡って逃げろという。福島で起きたことは、大分の私たちも避難民になりうるということでした。生活を根こそぎ奪う原発の過酷事故を前提として、原発が再稼働される—そのことが根本的に間違っています！

伊方原発は再稼働しましたが、私たちに「止められる」という「希望」があります。「原発止めろ」の声を裁判所に！ 頑張りましょう！



東京新聞 2016年8月19日

2016.8.19

再稼働の伊方原発に

対岸の大分生活不安

天気の良い日は、豊後水道を挟んだ対岸に再稼働した伊方原発3号機（愛媛県伊方町）の原子炉格納容器のドームが見える。原発から約六十キロの大分県杵築市大田でシイタケ栽培を営む中山田さつきさん（六十）は再稼働に不安を募らせる。



シイタケ菌を打ち込んだほど木を前に、伊方原発の再稼働を懸念する中山田さつきさん—大分県杵築市で

特産シイタケ農家「早く止めたい」

「過酷事故が起きれば、海を越えて放射性物質が飛来する。そんなことになったら、生活を根こそぎ奪われてしまう」

中山田さんの住む国東半島は、江戸時代からため池やクヌギ林を活用したシイタケ栽培が盛ん。その循環型農業が評価され、地域は二〇一三年、国連食糧農業機関（FAO）の世界農業遺産に認定された。中山田

さん方も代々続くシイタケ農家。自宅で乾燥させ、大分名産の干しいたけとして出荷する。今春は菌が入った「種コマ」をクヌギの原木に約九万五千個打ち、生育を待っている。

福島原発事故後、福島県産の露地栽培シイタケから基準を上回る放射性物質が検出され、出荷停止になった。生産量日本一の大分県産の下しいたけも、風評被害で価格が急落した。

「安全性に問題はない」と主張した。「事故はいっ起さるか分からない。一日も早く止めなければ」。再稼働した十二日、居ても立ってもいられず、発電所近くでの抗議集会に駆け付け

た。中山田さんは、原発再稼働に不安を募らせる。伊方原発3号機は、8月12日午前9時、再稼働した。中山田さんは、ゲート前で「また地震や雷が来るたびに、原発は大丈夫かと思わなならん…」と、悔しさに目をうるませながら言われました。

中山田さんは、原発再稼働に不安を募らせる。伊方原発3号機は、8月12日午前9時、再稼働した。中山田さんは、ゲート前で「また地震や雷が来るたびに、原発は大丈夫かと思わなならん…」と、悔しさに目をうるませながら言われました。

中山田さんは、原発再稼働に不安を募らせる。伊方原発3号機は、8月12日午前9時、再稼働した。中山田さんは、ゲート前で「また地震や雷が来るたびに、原発は大丈夫かと思わなならん…」と、悔しさに目をうるませながら言われました。

中山田さんは、原発再稼働に不安を募らせる。伊方原発3号機は、8月12日午前9時、再稼働した。中山田さんは、ゲート前で「また地震や雷が来るたびに、原発は大丈夫かと思わなならん…」と、悔しさに目をうるませながら言われました。